

まとめた。

感じさせる秀品である。

廟の所有する面をセットで考えるならばこの他に上関の侍将役の童子面二面、下関の侍将面二面を加えて考えなければならぬ。また今回調査では拝見していない面だが、皂班の面がある。面の数は多くないが、中には製作年代がかなりさかのぼれそうな面と新しい面が混在している。

やはりなんといっても、大菩薩の御神体には圧倒される。大きさからその威厳のある表情からも他の面を圧するものが感じられる。そして人々の大菩薩に接する態度からも、信仰の重みが比べものにならないくらい伝わってくる。当然面の作りも他の面は荒く稚拙である。大菩薩の面はさすがに丹念な作りをしている。人々は現れ出る大菩薩のはい下の神の登場を喜び楽しむ。しかし、大菩薩の登場は敬意し、恐れ、願い、拝む。芸能はやはり神の庭から出でて、人々の恐れる心からしだいに離れ、楽しみ心によって育ち、娯楽性を高めていくのであろうが、万載県には信仰の対象として神の出現する仮面の舞があり、同時に神を表現しながらも芸能化を一步進めた仮面の舞もある。面が神である限り、つまり人々が面を畏敬する限り、芸能の娯楽化は始まらないと思われる。万載県では面の神々と人々が交流をし、人々は神に会う事で祝福されると考えている。芸能がいまだ娯楽化せず、信仰の庭に存在している。

注

- (1) 田仲一成『中国巫系演劇研究』東京大学出版会、一九九三年
- (2) 唱えごとは、共同研究者劉鳳初女士の調査ノートを写させて頂き訳した。
- (3) 掃房に関しては、調査時に拝見できなかった為、聞き書きと共同研究者劉鳳初女士の調査ノートを参考にさせて頂き

彫りは先の天将と同じ。地は青色。眉は赤色。ほほの斑点は黄色。

(16) 上関・下関

御神体の新太爺の御座の下に下げられている侍将の面をおろして使用する。年代ものの面と見られる。

(a) 上関

地は赤茶色。目は逆八の字形につり上がり、突き出した黒目を残して彫る。目は見開き前方を見すえる。眉毛は細く逆八の字につり上がる。鼻は高く筋が通る。口はきりつと結ぶ。ほほはもり上がる。口のまわりから顎にかけて黒い鬚をうえ込む。耳は周囲を羽根のような図案に彫した半円形の板を左右につける。頭には模様の刻ざまれた被りものの上部に三角の枠の頂点を丸くした形のものをのせる。彫りや仕上げがなめらかで、実に美しい優品である。表情は御神体を守る武将の鋭い面構えをしている。

(b) 下関

彫りや彩色等上関とほぼ同じ。ただ目の表情が異なる。黒目は下を向き、じつと下を見すえるような眼差しをしている。

(17) 御神体・新太爺

地は黒色。長さ約二尺、幅一尺五寸の太面。目は大きくどんぐり形で、黒目を突き出して残し、くり抜く。眉毛は逆八の字に細くきりつと刻す。鼻は大きく中央にすわる。鼻孔を開ける。口は赤くきりりと結ぶ。ほほはもり上がる。頭には模様が鍍金された柴金冠を被る。耳はやはり模様を鍍金された半円形のを左右につける。冠の上には六尺の長さの刺繍を施した桃色の布製の角隠しのような大鳳帽を被る。この大鳳帽は毎年寄進する信者がおり、何枚も重ねられている。さすがに威風堂々たる表情の面である。やはり丁寧な彫りと彩色、仕上げが施され年代を

いる。

(14) 雷公

地は黒色。目はらつきよう形で大きく、黒目を中央に丸く残し彫る。鼻筋は通り眉毛の線へ連続して彫られている。口は上くちびるが逆三角形のくちばし形をしていて、口におおいかぶさり、顎まで達する。左右に口のわきが赤く見える。耳は長く脇につく。頭は中央と左右に三角の角を生やす。まさに追儼で活躍する恐ろしい神格を表現している。

(15) 四大天将

(a) 黒面天将

地は黒色。目はどんぐり形で大きく、飛び出した黒目を大きく残し開ける。眉毛は赤く下をぎざぎざに半円形に彫り残す。鼻は大きくすわっている。口は大きく裂けきちんと並んだ歯を見せ左右に牙を上下に生やす。裂けた口の両脇が彫られて開けられている。顎は縦にしわを彫る。ほほはより上がり、赤い斑点を施す。耳は淵が赤くぎざぎざの半円の板を両側にひもで結びつける。頭は左右に長い角を生やし、中央に雲に乗った仏像を載せる。やはり恐ろしい表情をしている。

(b) 紅面天将

彫りは先の天将と大体同じ。地は赤色。眉は黒色。ほほの斑点は緑。

(c) 金面天将

彫りは先の天将と同じ。地は黄色。眉毛、鼻は赤色。ほほの斑点は黒色。

(d) 藍面天将

地は赤色。見たところ年代ものの面。目は逆八の字形で、丸く飛び出した黒目を残しくり抜く。目尻の線、まぶたのあつみなどはつきりなめらかに彫られている。眉毛は逆八の字に細くきりりと傾斜をつけて彫られ、黒色が施される。鼻は上品に高く、ほほがたるみをもって彫される。口は薄くきりりと閉じる。口のまわりにたるみが彫される。ほほのたるみの線から顎にかけ赤色の鬚が埋め込まれている。耳は長く脇につく。頭には黒い官吏の冠を頂く。鼻の塗りののはげた所から、彩色のあとを除くと、木地に漆が重ねられている様子が伺える。他の面とは彫りのなめらかさ、彩色の丁寧さがまったく異なる優作である。小鬼に翻弄される役柄に以合わない面構えだが、上演後の追儼儀礼で力を発する神格がうかがえる。

(11) 前思郎

地は白色。目は逆八の字形、黒目を残しくり抜く。眉毛も逆八の字形。鼻筋も通る。口はきれいに並べた歯を見せて丸く開き、顎の所を縦に切り込みを入れ、顎を動かすことで口が開くようになっていく。耳は細長く横につける。頭には冠をつけず黒く塗る。顎を切ることで、よく話すこの神の神格を表わしている。

(12) 城隍

地は白色。目は一文字にきれながで、黒目を丸く残して彫る。眉は一文字で先がはね上がって描かれる。鼻筋は通る。口は閉じ左右のはじを開ける。口のまわり、顎にも毛が植え込まれる。耳は長く脇につける。頭には模様を施した黒い冠を頂く。

(13) 土地

地は肌色。目は黒目を残しくり抜く。口は笑ったよう。鼻は高くすわる。口のまわり、顎に白い鬚を植え込む。耳は長く横につけられる。顔全体にしわがきざまれ老体を表わす。頭に黒い帽子を被る。柔和な老人の表情をして

(6) 楊帥

地は白色。目は細く逆八の字形、黒目を丸く残し開ける。眉毛は細く短い逆八の字形、口は赤く小さく細く閉じ、左右のはじを開ける。鼻筋は通る。耳は長く両脇につく。頭には三角の被りものをつける。ほほは三角にこけたようにつくる。眼差しが將軍らしく鋭い。

(7) 鮑三娘

地は白色。目は細く逆八の字形で、黒目を丸く残しくり抜く。眉毛は弧を描く。鼻筋は通る。口は細く閉じ左右を小さく開ける。耳は細長く脇につける。頭は結いあげたような山形で、とりの彫りものを飾ったバンドをまいたようにしている。ほほが少し細くこける。楊帥のような武將に通ずるりりしい顔立ちをしている女性である。

(8) 花関索

地は白色。目は逆八の字形、黒目を丸く残し開ける。眉毛は逆八の字形で先が上に向く。額に第三の目を描く。鼻筋は通る。口は細く閉じ両脇を少し開ける。まわりに鬚を少し描く。耳は長く横につく。頭に模様入りの冠をつけ、顎の下で結び目をつくる。第三の目を描くなどして天上地下を見通す力のあることを表現している。

(9) 小鬼

地は緑色。目は大きく丸く飛び出した黒目を残してくり抜かれている。眉毛は額にかけてもり上がった場所に一文字に描かれる。鼻筋は通る。口は赤く笑ったように開く。同時に、黄色く丸の描かれたほほはふっくらともり上がる。顎にも丸みがある。頭には冠はなく、左右に赤い角が生える。耳は脇に長くつける。いたずらな笑ったような表情が伺える。二面あるがほぼ同じ。

(10) 判官

ともどこかとぼけたような優しさのある面だ。

(2) 走地

地は白色。目は細く黒目を丸く残し両脇をくり抜く。眉毛は細く丸い。口は赤く薄く閉じ、両脇を細くあける。鼻は筋が通り高く鼻孔を開ける。耳は長く横につく。頭には全面に花柄の彫りものを施した冠を被り、あごの下で赤いひもを結んだように彫られている。優しげな表情。

(3) 先峰

地は白色。目は逆八の字形で細く、黒目を丸く残し、両脇をくり抜く。眉毛も逆八の字形で細い。口は赤で小さく薄く閉じ、両脇を細く開ける。鼻筋が通っている。耳は長く両脇につく。頭には全面に赤と黄の菱形の施した被りものを被り、やはりあごの下でひもを結んでいるようになっている。神兵を招く役柄に合わぬ優しい表情をしている。

(4) 功曹

地は白色。目は三日月形に細く、黒目を丸く残し、両脇をくり抜く。眉毛も細くこうを描き先端が少し上に上がっている。口は細く閉じ、両脇を少し開ける。鼻筋は通っている。耳は長く両脇につく。頭には日月と描かれた被りものを被り、あごにひもが描かれている。やはり優しげな表情。

(5) 緑品

地は緑色。目は細く逆八の字形で、黒目を丸く少し開ける。眉毛も逆八の字形に細く短い。鼻筋は高く通る。口は薄く丸く閉じ、両脇を少し開ける。耳は長く両脇につく。頭には前面に六角形の飾りを施した被りものを被り、あごでひもを結んだようになっている。財神という役にしては、スマートな感じを受ける。

ドラが鳴り響く中雷公を先頭に、劍等のとりものを振りつつ、神々が入場する。神々は雷公、四天天将（黒面天将、紅面天将、金面天将、藍面天将）、判官、城隍、先峰、土地の順に丸く行進する。ドラがまた激しく鳴り、上関下関が入場する。大菩薩の役の者と御神体の新太爺の面が祭壇から降ろされ入場する。一斉になりものが鳴り、爆竹が鳴り響く。面がつけられると、その場で神々はとりものを持ち、左右に交互に振ったり、とりものを掲げながら回ったりする。大菩薩が台にすわり、上関下関が前に控えると、神々は輪を作ってとりものを振りながらそのまわりを回る。子供を連れた老婆や子供がその輪の内側に入ろうとひしめきあう。神々は太菩薩に礼をし退場してゆく。最後に土地上関下関が退場すると、大菩薩が残り、南と北に向かって七星宝剣を左右に横に振り、その場の悪霊を退治する。最後に南面して劍で収の字を描き、飛んで終る。子供達は皆手を合わせる。面がはずされ、退場となる。

本来神々はもっと多く登場するのだろうが、⁽²⁾出稼ぎ等のため人数がそろわず、普段より少なかったかもしれない。

三面

面について紹介する。

(1) 開山面

地は黒緑色。黒く丸い大きな突び出した目の下を細くくり抜く。赤く太い眉毛。口は大きく赤く淵どられ、前面は白い歯を剥き出しにし、左右に上下に牙を生やす。牙の両側をさけるように丸くあける。鼻も大きくすわる。耳は外側をのこぎりのようにぎざぎざに赤く淵どりをした半円の板を面の両側にひもで結びつける。黒い頭の上の両側に赤い角を生やし、中央に黄金の人面を施す。ほほは白い斑点が入る。恐ろしい風貌を表しているのだが、なん

百歳のお爺さんは蓮花形灯籠のかけられる処を賑わして、
花の咲いている木にすがりついて、思う存分戯れる。
花が咲き、花が落ちることは毎年のこと、
年寄りが若者になったこともある。

正月十五日に元宵の灯籠、

二月に、あたり一面の青草。

三月の清明に白い紙錢をかけ墓参り、
四月の立夏に田植えをする。

五月五日に、竜舟の太鼓が敲かれ、

六月に、新米で洗濯物に糊づけ。

七月に、秋風がだんだん吹き出し、

八月に、秋風がますます涼しくなる。

九月九日に、重陽の酒を蒸し、

十月に、立冬になる。

土地はここを通れば、一畝の田で二十かこの穀物をよけいに収穫する。

人々は楽しげに聴く。笑い声さえもれる。歌った後に南の端に移り、北面して神々を呼びよせる。

(15) 団 将

判官が小鬼を捉えようとするが、身軽な小鬼はなかなかつかまらず逃げまわり、判官は手をやく。小鬼の方が判官を翻弄し、追いかけて楽しんでいるようである。最後に結局つかまり、判官は剣を振り南に向かって跳びはね終る。判官は紅い長着を着る。

(11) 上関・下関と(12)前思郎と(13)城隍伝旨は一連のものとして扱う。

上関・下関は、御神体の下にも面が飾られており、儼神の武将で、生前は兄弟とされる。

まず、二人の侍者が斧を持って現れ、その後に上関が登場し、二本の剣を両手に持ち振るって正面の台にすわる。儼神の耳目につながり、神の祝言を伝えるとされる前思郎が扇をあおいで現れ、上関は右手に剣を持って掲る。前思郎は上関に敬意を表し舞う。前思郎が退場し、ドラが激しく打ち鳴らされる中、上関が台に立ち、下関がなぎなたを持って現れ、上関の侍者そして上関と闘う。下関の座所に代わり、二人の侍者が侍り、下関が中央の台にすわる。そこへ玉帝の欽差大巨の城隍が玉帝の使者として「和解せよ」という聖旨を持って現れる。下関は城隍に敬意を表す。下関は聖旨を受け、座を入れ代わって聖旨を掲げると、城隍は敬礼し退出する。下関は最後になぎなたを振るい跳びはね退場する。衣装は上関・下関ともに銀色の龍や獣図の刺繍入りの武将の長着を着ける。城隍は赤糸で龍図の長着を着ける。前思郎は、城隍に同じ。

(14) 土地

新年をことほぐ喜神である。右手に扇、左手に杖をつき、背中をふくらませて腰をかめた老体で現れる。そして遠方からこの家にやって来たが、この家が豊かで、また長生きすることを祝して、新年の歌を歌いましょうと扇をあおぎながら次のように吟ずる。

(6) 楊 帥

右手に長い柄の斧を持ち、振りながら登場。南東に向かって斧を上下させてから、飛び上がり斧をほおり、前回りをして、ひざまずき、印を結ぶ。この時に唱えごとをする。また左手で斧の先を持って、右手で印を結んだり斧を上下させたりを南北の方向に行う。兵を率いて悪霊を退散する將軍役である。衣装は開山と同じ。

(7) 鮑三娘與花関索

演目中唯一、せりふが交わされる。また鮑三娘は演目中唯一の女神でもある。花関索は関イの死後妊娠した妻が花氏に嫁ぎ生まれた子という。額の眼によって天の三三層、北の一八層を見ることができるといふ。三娘、関索の順に現れ、南を向いて前後に並んだまま、互いに顔を対面しないで對話が進められ、三娘は両手に二本の剣をとり、関索は槍をとり向かい合つて闘いとなるが、和して再び前後に並んで南を向いて對話をして情を交わし、最後に横に並んで結婚して終る。衣装は花関索は先峰と同じ、鮑三娘は赤いスカートにピンク色の長着を着る。

(8) 小鬼鉗圈

二人の小鬼が、竹の輪を中心に、軽技を披露する。跳んだりはねたりするばかりでなく、二人の息の合ったざれあいが楽しい。衣装は上下ともに赤。

(9) 小鬼爬扛

二人の人が三メートル以上の竹の竿を肩にかけ、一人の鬼がその竿の上で体操の鉄棒のような演技をする。また二本の竿を十字に組み四人の人が担ぎ、その上でやはり鬼がかなり激しい動きの高度な軽技を演ずる。猿になったかのような身振り手振りで人々を笑わせながら、時にわざと落ちそうになるなどスリルのある演技である。

(10) 判官捉小鬼

(1) 開山

その名の通り、上演の一番最初にその場を清める役割を担っていると思われる。長い柄のついた斧をもち、回したり、体の前でもったり、足踏みしながら各方面で繰り返す。南に向かって膝を立てて、斧を構え、斧を上下させ、もう一方の手で印を結ぶ。北に向かって再び斧を振り、南に向かって繰り返し、最後に跳びはねて終る。衣装は上下共に赤く、龍の図柄に波を描く。下に赤いズボンをはく。

(2) 走地

右手で払子を持ちながら、左手で印を結び、やはり南北東西の各方角を清める。衣装は上下とも緑色で地に竜の図柄、波の図柄を施したもの、下に赤いズボンをはく。

(3) 先峰

右手に赤い三角旗を持ち、回しながら、各方角から神兵を招く。みかん色のやはの獣の図柄を施した長着をつける。

(4) 功曹

右手に柄の長い斧、左手に牒文を持つ。斧を回し、体の前に持ったりと足踏みしながら各方面で繰り返す。動作は開山とほぼ同じ。天帝の命を下界に伝える役。衣装も開山と同様。

(5) 緑品

右手に如意棍と称される三〇センチ位の棒を持つ。棒を回し、左手を印を結びながら回す。また棒を左手に持ち替え、体の前に横に持ち、右手で印を結びながら棒の上と下に手を動かす。南と北に向かって行う。足は足踏みをしながら、四方から財を招く財神だという。衣装は走地と同じ。

求宝 名前 年月 日生

長命富貴

易長成人

上演最後に御神体の面をつけて大菩薩が現れた時、子供達が一斉に周りにつめかけ、手を合わせていた姿からも、この神が子供に關係の深い神であるといえると思う。

また一つのエピソードをつけ加えよう。ある姑が嫁に跡取りが授かるように御神体に祈り、占いをした。卦は表・表と出て、女の子が生まれると出た。姑はなんとか男の子を下さる様に願ひ、願ひが叶えば六年間儼神を招いて上演を依頼すると約束した。するとはたして嫁は男の子を授かったという。これも子供に関わる神格を表している。

將軍神にかかわる祭りは、正月を除き、九月一日の神の誕生日が盛大に営まれる。この日には御神体が全部廟に帰り、遠方は湖南省方面からも参拝客が大勢訪れる。この日は儼班の上演はされず、廟の中の舞台で他地から招かれた劇団による上演が催される。

二 演目と仮面

演目と仮面について以下に記す。演技は簡単に説明するに留める。なりものは、二面のドラと木魚のリズムで進められる。

儺廟の管理費や祭りの経費は以前は丁氏一族の所有していた一万畝もの山林でまかっていた。そして儺廟は丁家一族の祖先を祀る祠堂によって維持管理されていた。解放以前は丁氏一族の管理組織として、丁会（丁添会）・禁会（禁山会）・祇会（祇祠会）・清明会・中元会・接神会（儺神会）があり、それぞれ人望の厚い者がリーダーの任に当たった。

一九九四年九月五日の調査時に上演を依頼した、つまり接儺を行った家の状況は以下の如くである。

戸主	丁永祥	三五歳	妻	李正香	三三歳
子供長男	丁包発	一三歳	長女	丁桂紅	一一歳
次男	丁坤発	七歳	三男	丁春発	五歳

次男の病気が治ったので、お礼のために儺班に上演を依頼した。この家の近所の家々の者も供物を持って集まり、老婆が子供を連れ御神体に礼拝していた。

この御神体は將軍という名をもち、悪を祓い除く強い力を持っているわけだが、一方では人々から大菩薩と呼び慣わされ、特に子供を守護する神として絶大な信仰を集めている。廟の壁には、病氣平癒を祈る垂幕の他に子授かりや子供の成長を祈願する垂幕が数多く下げられている。その他子供の無事成長を願って香袋という一〇センチ程の赤い袋がいくつも下げられている。この袋の中には、ごま・大豆・米・麦・とうもろこしが入れられている。また袋の内側には次のように生まれた子供の名と生年月日が記され、健やかに育つようにと願いが記されている。

丁玉撥 二八歳 //

四大天将

丁尧明 二一歳 //

丁橋平 一七歳 //

丁勇尧 二〇歳 座菟旗をもつ 開山・小鬼・功曹・楊帥

丁河南 二一歳 調査時出かせぎで不在 (前司郎) (鮑三娘)

構成員の年齢は七九歳から一六歳と幅広いが、全員が仮面をつけての演技をこなせるわけではなく、一部の者に役が集中するようである。構成員それぞれが担当する役柄については、以前は決まりごとがあった。例えば、開山は案首の中から選ばなければならなかった。しかし今では若い者にやらせるようになったという。しかし、線香を捧げる役の者は土地と城隍を担当し、紙銭を燃やす者は大菩薩を担当し、功曹は案首の中から担当しなければならぬという決まりは今でも守られている。構成員は全員丁姓で、丁氏一族が伝承している演技といえる。世襲が義務づけられているわけではないが、大菩薩を演じる丁根生は三代続けて演じているという。成員の内八名が老芸人で、他はここ数年入班した者である。年老いて動けなくなるとやめる。若者は好んで入班する者が多く、本人が希望し案首の同意さえ得れば入班が許される。入班に際して一切金品等の礼は必要なく、正月一日から入班し、先輩の演技を見、班首について習い覚える。四名の班首は現在固定化しているが、元来は毎年交代で、当たっていた。儼班の成員は正月の上演に当たって、体を洗い清める。しかし、食物や同房を禁ずるような特別な忌禁はない。儼廟は皇帝の勅封を受けた由緒正しき廟ということで、儼班の成員達はある種の誇りを持って芸能を伝承し続けているし、またこれからも伝承し続けなければならないと考えているようだ。

丁嫂妹	二八歳	衣装箱を担ぐ	
丁竜生	三二歳	皂班	
丁秋苟	一八歳		
丁竜生	一六歳	劍等、とりものを入れた皮筒を担ぐ	
丁功平	一七歳	靴を入れた鞋簍を担ぐ	(童子) 点兵
丁秋生	七三歳	傘蘭を持つ	(皂班) 上関(丁水根の代役)
丁石苟	六〇歳	病氣中	(鮑三娘)
丁茂生	六三歳	城隍・四大天将・前司郎	(丁河南の代役)
丁洪斌	二〇歳	太鼓をたたく	走地・小鬼・緑品・雷公
丁礼尧	二二歳	小太鼓をたたく	鮑三娘(丁河南の代役)
丁細源	四六歳		
丁成尧	六二歳	ラッパを吹く	
丁掃妹	二六歳		
丁水根	二六歳	第一の輿を担ぐ	調査時出かせぎで不在(四大天将)(上関)
丁国	三七歳		
丁月林	二六歳		
丁秋牙	五〇歳		四大天将
丁永根	二二歳	第二の輿を担ぐ	下関(丁石苟の代役) 四大天将(丁水根の代役)

調査時、丁吉安氏の家に祭られた王將軍御神体の様子を見た。丁吉安氏は、元池溪村の党支書記で六四歳、村の様子等を説明してくれた方だ。ちょうど家を新築しているところで、工事の無事を願って、御神体を預かっているということだった。寢室の机の上に鎮座した御神体の前には線香台が置かれ、その燃え残りから察するに、大切に拝まれていた様子であった。新太爺と老三爺を除く六体の御神体は、すべて廟から家々に借り出され、丁吉安宅の場合のように人々を身近に守護しているというわけだ。一番古い老太爺の御神体は、廟の留守を守ることが多いが、調査時には、病人が出た家に借り出されていた。

攤班の構成員は二八名で、内リーダー役の攤首は四名が当たる。行列や上演や祭祀において攤首やその他の攤班の務める役割が決められている。調査時の役割を記したが、祭りの時は（ ）も担当する。まず四名の攤首から、

丁啓和 七九歳 数年来年役の案首を務め、事実上の最高位にあり、祭儀に呪文や香眷等を唱える 土地（城

隍）（先峰）花関索

丁根生 六八歳 大菩薩（三代世襲の役）（開山）（功曹）（楊師）

丁湖南 六一歳 先ぶれ役の出馬を務め、家々に神の到来を告げる

丁福生 六〇歳 御神体を輿に搬ぶ起神を務める 判官（緑品）（走地）

その他の成員については、

丁会貴 三三歳 仮面を入れた神箱を担ぐ

一八日——馬歩郷郭村（五〇km離れる）

一九日——村に帰り休息

二〇日——株潭鎮楊源村

二二日——株潭鎮棗木村・獲富村

二六日——宜春市慈化郷柳亭村・百壙村（三〇km離れる）

二八日——黄芳郷改江村・中羅村・郷辨林場・王埭村・路下村

二月四日——双橋郷紹江村・龍田村・黔田村

一日——廟に戻る。

最後に帰儼（封案）、つまり一カ月以上の遊行を終え、神が廟に戻られる。この日は二月一六日と定められている。この日には、どんな遠出をしようと必ず廟に戻り儀式をとり行わなければならないとされる。儀式では、案東が下馬咒つまり神様に馬からお降り頂く唱えごとをし、神に廟の御座にお戻り頂き、ローソクを灯し、線香を供え、四人の儼首が準備した封案酒と称される酒を供える。

また何か願い事のある人で、御神体を自分の家に迎えて長期間お祭りしたいと望む人々が早朝から集まり、占いを行い、どの家が御神体をお迎えできるか決める。この時御神体の仮面ばかりでなく、上演時に使用される面も借り出されることもある。

調査時には跳儼の際用いる新太爺と老三爺の二体の御神体が残されていた。

また上演に使用された、道具や衣装は箱に納められ、封がされしまわれる。

御神体を自分の家に借り受けお祭りする場合、治病・子授かり・新築工事安全といった様々な願いが背景となる。

に、家内安全であるように等何か願い事がある場合上演を依頼し、儼班が了承した場合上演が行われ、翌年にお礼の願もどしを依頼し、その後毎年慣いとなるようだ。種々な事情で上演が依頼できぬ家は、儼班が近くまで来た時に、家に御神体を招き一休みしてもらうこともあるという。この場合礼金も少なくてよい。礼金は決まりがなく、家々のふとところに応じるが、上演を行ってもらうと、一〇元の家もあれば、一〇〇元出す家も二〇〇元出す家もあるという。一九九四年での儼班の上演収入は二〇〇〇元程であるという。この収入は菩薩の誕生日や衣装を揃える費用等に使い、差し引き演者一人当り一日一元得る。その他家々では儼班への礼金とは別にラツパふきに一元〜二元礼金を包む。一九九四年の上演経路は次の通りである。

正月一日——丁氏宗廟

二日——村東頭竜家江 丁賛女家・丁根闌家

村北頭檔仔上 羅亨聚家

四日——潭埠鄉池溪村 九戸

五日——株潭鎮の各村

八日——潭埠鄉の各花火工場

九日——潭埠鄉天楊村・芳林村・昌集村

一二日——嶺東鄉柴田村・藍田村・新華村

一五日——宜春市楠木鄉

一六日——高城鄉高城村・奇楓村

唱え終ると、指を折って「子丑虎卯辰巳午未申酉戌亥」と唱える。戌を唱える時、剣を研ぐ所作をし、亥を唱える時は、剣を振り斬る所作をする。三回足を踏み、楽器が奏される。雷公は剣を持ち、判官と四大天将を率いて、家中の全ての部屋に飛び込み、邪悪なものを総房へと追いやる。鬼やらいを済ませた部屋は、戸を閉め、最後に総房に集まる。雷公は部屋の中央に立ち、判官はその後に、そして四大天将は部屋の四角に立つ。四方礼拝をする。雷公は雄鶏の口ばしに酒を注ぎ、用意していた五つの茶碗にも酒を注ぎ、雄鶏の首をさし、血を茶碗にしたたらせて唱えごとをする。

五方五帝五雷公、欣々として祭壇におられる。邪鬼どもに承認しない者があれば、即刻に打ち殺して形跡も留めぬ。

と唱え終え、雷公は剣で床に「紫微令靈臺」と描く。最後の一画を書く際、力強く足を踏む。四大天将及判官は、傍らの茶碗を打ち壊す。このかけらは村の三叉路に棄てる。総房から人々が出て戸を閉め、雷公は戸の上に「囿」字を描き、門を閉じた意を表す。祭壇の間に戻って、殺した雄鶏と刀を外に向かって投げ棄てる。この時鶏の頭が外へ向いていれば大吉、そうでないとやはり災があるとされる。雷公に扮する丁錫峰によれば、「鶏を投げ棄てる時に無用の者はうろうろしてはいけない、なぜなら掃房の後、邪氣は全て鶏にのり移っているので、その氣にふれるとよくないからだ」ということだ。

全てを終え、演者達はまた次の家に向かう。順路は一二月頃翌年の訪問先を儼首達で決める。今年訪問する家は、前年からの訪問時から約束している場合が多い。家畜が増えるように、豊作であるように、新築が無事に運ぶよう

上演が終ると、祭壇上に供えておいた百家衣や腕輪を降ろし、儼首から赤ちゃんに着けてもらう。子供を連れた女性が次々祭壇に拝みに来る。子供の健やかな成長を守る神として信仰されている。

主人が儼班に礼金を渡す。またこの時来年の上演を依頼する。

次に掃房⁽³⁾だが、次のような場合にとり行われる。団将の大菩薩上演時に、大菩薩の演者が仮面が重く感じ、目の前が黒くなったりした場合、その家に災があると判断され、それを聞いた主人は掃房を依頼する。

家の門、窓、たんすの戸などを全部開け、邪悪なものが身を隠せないようにする。一部屋を総房とし、東・西・南・北・中央に、茶碗を置き線香を三本ずつ立て、また中央に雄鶏と包丁と酒を置く。掃房を行う主な神は、雷公とされ、雷公の面を被った演者が門から祭壇を設けてある正面の部屋に入り、判官と四大天将がそれに続く。雷公らはまず御神体に礼拝をし呪文を唱える。呪文は、

お招き申し上げます。

五雷五兵神、猛火や雲に乗って降臨なさいます。

五方五千五雷兵、五五二十五万五千五雷兵。

猛火は崇^{たか}つている邪鬼を焼き、雄心鉄胆で妖精を打つ。赤い炎がかんかん邪鬼を焼くが、邪鬼だけを焼き、人間に触れない。

体の向きをかえて雲の中で邪鬼を討伐し、体の向きをかえて災厄の鬼を捉える。

わたしは今御降臨を願います。雷の威勢を示すことを擁護する。ひびく雷公大天尊、五方五帝五雷公、欣々として祭壇におられる。邪鬼どもに承認しない者がいれば、即刻に打ち殺して形跡も留めない。

閣下の靈威は、輝いています。

お恵はあまねく世の中に施し、和やかな空気が満ちています。

法螺が吹かれ、太鼓の音がひびき、季節に応じます。

ローソクを点け、線香を点し、老若とも御恩に浴します。

信者たちは恐れ入り、すべて神の御庇護を願います。

御降臨を迎え、全家の無事平安を祈ります。

物が多く民ゆたかで、到处に人々を支え助けて福をもたらします。

名が成り、利益が遂げられ、すべての願いに、陰ながらの助けをお祈り致します。

謹んで神の御恩に感謝し、将来のことまで御加護を祈ります。

謹んで申し上げます。

信士

××× ××× ×××

×年×月×日

占いをして神の意志を問う。陰と陽がそろって好卦と出ると、香簪を燃やして接儺の儀式は終了する。

次に、家の祭壇前の少し広い場所で跳儺が始められる。演目は先に宗廟内上演のものと同じ。一七番目の演目、団将の一番最後は、「大菩薩」の場面となり、御神体の新太爺の仮面を儺首の丁根生が着け、七星宝剣を手にし現れる。剣をゆっくり振り、邪悪なものを退治する意味で「収」の字を描く。また三回地を踏む。子供を抱いた老女や子供達が大ブサの周りにできるだけ近づこうと集まる。皆手を合わせ拝んでいる姿に、まさに真なる信仰が伝わってくる。

次に案東によって水でその場が清められ、神まぎの唱えごとがされる。家の主人が、家族の名と生まれた年月日そして儼神を褒めたたえる語句を記した香簪を案東に渡す。案東はこれを読み上げる。香簪の内容はそれぞれの家によって異なる。次に例を示す。

神光普照（神の光があまねく照りわたる）

今は中華人民共和国江西省宜春地区万載県潭埠郷濠田村より、村民張菊生は全家を率いて、手を洗い、線香を点し、匍匐して叩頭致します。謹んで思いますに、

真心をこめてお祈り申し上げます。

神の光はあまねく照りわたります。

万家はすべて新面目を呈し、人文は盛んに発達しています。

立派な將軍の威光が輝き、長寿になるよう桃の葉に手で触れます。

新年の色彩にかわり、冬が去り、春が来しました。

神は悦び、人間も楽しんでいて、家族が団らんしています。

靈威のある儼神を崇め、ここの田園でお祭り致します。

戈を執り、盾を掲げ、家々のために災疫を逐い払います。

（暑さや寒さ）を迎えたりして、所所に吉祥万福を賜ります。

方天家（方相氏？）の司ることにより、長寿を賜る儀礼に、皆が立って仰ぎ望んでおります。

謹んで思いますに、

③ 道具箱を天秤で担ぐ者、とりものを入れた籠を担ぐ者四名

④ 三角の赤い旗にドラを下げて持ち打ち鳴らす者二名

⑤ 打ち上げ花火を打つ者数名

⑥ ラッパ、ほら貝、角笛、長ラッパを吹き鳴らす者数名

⑦ 中小の太鼓を持つ者数名

⑧ 大太鼓を乗せた台を担ぐ者二人、太鼓を打つ者一名

⑨ 御神体の乗せられた輿、老三爺が前、新太爺が後の輿で、二台を担ぐ者それぞれ二名ずつ計四名

輿の前中後に万民傘と称される傘を持つ者四名

⑩ 黒地に金で竜の図柄をぬいとりした座篭旗を持つ者

廟から水路沿いに田んぼ道を、楽器の奏でる賑やかな音と爆竹の音の中を、上演を約束している家へと行列は進む。

接儼班は、文字通り演技者達を迎えることを意味する。演技者が訪れる家には、出馬と呼ばれる先づれ役が、片子と称される神の訪問の日時、そして宿泊や食事の要を告げる書状を届ける。

村に入ると行列の中の打ち上げ花火が三発鳴らされ、これに応じて迎える側の家も三発打ち上げる。合わせて爆竹がけたたましく鳴らされる。人々は家の戸口に居並び、儼神をうやうやしく迎える。賑やかに楽隊が演奏する中、御神体は、神棚正面の祭壇の上、新太爺は右に、老三爺は左に乗せられ、これを安位と称する。ローソクが灯され、紙銭が燃やされ、供物が供えられる。供物には、豚の肉・鶏・魚・丸く数層に重ねられた餅・果物・酒・茶等が供えられる。

た。お顔は赤いなつめのようで、齒が銀のようであります。かつて玉皇の勅命を受け、今は下界に降りて儼神になりました。七二候（一年中の天候）を掌握し、二四の劇に速やかに命令を聞かせます。太鼓が打たれ、ドラの音がひびき、疫病を逐い払って良民を救います。昼には、俗世間で禍福を判決し、夜には、冥土で神兵を検閲します。求めることがあればすべて応じられ、どんな願いでも心にかないます。大慈大悲大勝大慈。

勅命を以て封じられた沙江橋歐陽金甲得勝大將軍閣下のために、二四の劇を演じます。舞踊をし、音楽を奏でます。左右の將軍は家庭に座り、あまねく供える香火を享けます。信者たちは、祠で敬意を表わし、虔しく水であたりを清めます。酒を杯についてお祭り致します。一回、二回、三回酒を杯につぎます。三杯圓滿にお供えしてから、酒を再びつぎません。三杯で大道に通じ、麒麟閣の上で玉皇に拝見します。

江西省宜春地区万載県潭埠郷沙江社

大漢中華人民共和国大王山祠下

そして神に出馬の意志を問うために占いをする。打ち上げ花火が鳴らされ、ラッパが吹き鳴らされドラが打たれる。

次に二体の新太爺と老三爺の御神体が運び出され、輿に乗せられる。ドラや太鼓が打たれ、長いラッパやソーナが吹かれ、爆竹がけたたましく鳴らされる中、輿は「四大天将」を演じる役割の演技者二人ずつによって担がれ廟を出る。行列の順は、次の如くである。

- ① 黒色で帥と記された畳二畳分もある赤色旗を持つ者一名
- ② 赤色で丁と記された畳二畳分もある白い旗を持つ者二名

お招き申し上げます。

このあたりの土地神祇、再び降臨して下さい。天に昇り、地に達し、奥深い処から出て、冥土に入つて、わがために消息を伝えて下さい。止つてはいけません。功を立てる日に、上奏します。上の天地自然に請います。汚れの気が分散し、洞の中はひろびろとして明るくなります。

保元大帝は、百方に威霊を現わし、われわれのために自然を助けて下さい。

天から授けた靈宝であるめでたい兆は、あまねく九天（到る処）に降ります。道を行いますと、道を得ます。汚れの気が全部散つて消えました。

仰いで申し上げます。

楊帥大將軍は、身に金のよろいをつけて、天地に輝きます。御出産は長沙府の楽県で、もともと羅鼓江のほとりの方でおられます。一八歳で天上に呼ばれ、紫微台の上で竜を斬りました。

頭に竜と鳳凰の尾をのせて、手に斧を執つて妖精を斬ります。千百万の精兵を統率して、五湖四海（全国各地）の良民を救います。どんな靈鳥をも降伏させます。恭しく礼拝します。千の処が願えば、千の処で靈を現わし、万の処が願えば、万の処に降臨なさいます。今日、弟子は謁見に参りました。飛ぶように馬を馳せて祭壇に降臨なさいます。わたしは、今お願いを申し上げ、御降臨を望んでおります。雷のような威力を賜り、御加護を祈ります。真心をこめて帰依の礼を致します。

玉皇の勅命を受けた威風堂々たる將軍、歐陽金甲大將軍は、妖魔を降伏する七星剣を手に執り、金のよろいを身につけて、神兵を統率し、世の中を巡視して妖魔を踏み、玉皇から賜った雷のような威力で太鼓を打たれました。太鼓の音がびびきますと、ドラの音が呼応します。遙かな処から良民を救うために俗世間に御臨しました。

った。追儺行事が再開されたのは一九八三年のことという。

追儺行事のことを、ここでは跳魘と称し、陰暦一二月二九日から二月一六日まで、開儺・出儺・接儺班・跳儺（跳魘）・掃房・封案の順に行事が進められる。まず開儺であるが、一二月二九日に、借り出されていた御神体を廟に戻し、御神体の面を浄水で拭き清め、また面の頭の被りものを新しくして神龕に置く。その他の上演に使用する仮面も拭き清める。演者達は丁氏宗廟で昼食後、廟に集まり、その年の祭りの中心的司祭者である案東の役を決める。今ではこの案東役は丁湖南に固定化している。一月一日にまず丁氏宗廟で次の演目が順に上演される。(1)開山、(2)走地、(3)先峰、(4)功曹、(5)緑品、(6)楊帥、(7)鮑三娘與花関索、(8)小鬼鉗圈、(9)小鬼爬杠、(10)判官捉小鬼、(11)上関與下関、(12)前思郎、(13)城隍伝旨、(14)土地、(15)団将。村中の人々が見にやって来る。中には自分も演技者になりたいという者もいる。その場合、演技者の中でも長老の四人の儺首達が認めれば、演技者達の儺班に仲間入りを許される。毎年二、三名の新人者がいるという。晩に儺神廟に戻り、面や衣装等を箱に納め、翌日からの家々を巡る上演に備える。

次に出儺だが、二日の早朝、演技者達は儺神廟に集まる。進行役の案東がローソクに火を灯し、紙銭が燃やされ、全員神龕に向い、案東が線香を供え、神まぎの唱え⁽²⁾ごとをする。

謹んで思いますに

清々たる水、日月はとけて分かれた。

その中に北斗があり、三台（六星の名）が守られています。

神水を一回撒きますと、汚れが解きだし、神水を三回撒きますと、汚れが尽く落されます。

が色が違う。

老太爺—張万寿 黒面 明代の製作とされる

新太爺—周榮光 黒面

二 爺—鄭光 紅面

老三爺—辛寿 紅面

新三爺—李洪 紅面

五 爺—陳啓 黒面 明末清初に盗まれる現在ナシ

老四娘—謝責 白面

新四娘—劉金妹 白面 民国三六年（一九四七年）製作される

王將軍—周強 黒面 民国三六年製作される

調査時（一九九四年九月五日）には、この内新太爺と老三爺が神龕に置かれ、他の御神体は、新築中の家、病人のいる家等に借り出されていた。

御神体の面は、飾りの彫られた椅子に置かれる。形状は目は材質は梓樹（キササゲ）、椅子の下には上関・下関二名の侍将の面が掛けられている。

これらの面は、丁姓一族の団結力によって文革中も破壊されることなく守られた。文革で大抵の廟の神像は壊された中、丁氏は急ぎ新しい面を彫らせ本物とすりかえ、これを燃やしたという。このことを外にもらす者もいなか

の下羅祠（現在黄茅郷）、范塘の范塘廟（現在白良郷）、楮樹潭の古湯祠（現在株潭鎮）、沙江橋の沙江祠（現在潭埠郷）、県署の旁（現在県城付近）、馬鞍嶺の馬鞍祠（現在黄茅郷）、桐溪の桐樹江祠（現在株潭鎮）八カ所あった道光六年『万載県志』の記録にある。その内沙江橋（潭埠郷）のみが現在でも御神体と追儼行事を伝承している。田仲一成が分析しているようにこの村は、明清時代以来、官吏の成功者を輩出した丁氏一族の村で、その経済力と組織力の由に伝承が可能になったのである。

潭埠郷は万載県の西部に位置し、県城からは四〇キロ程離れる。沙江橋は現在この潭埠郷の池溪村に相当する。地溪村は人口約三八〇〇人、戸数八七九戸内丁姓は六一七戸を占め、全戸の約七割が丁姓ということになる。その他一一の姓がある。村の成員は全て漢族である。池溪村は農業と林業を主な生業としている。耕地面積は約三七七八畝、二期作で稲作を行う。山林面積は一万畝、林場の収入が村の重要な現金収入となっている。また村のどの家でも、爆竹作りの内職を行っている。宿泊先となった潭埠の花火工場では日本からの花火買付業者のために花火大会が催された。村の内職として生産された爆竹が日本で売られていると考えるとなんとも親しみが感じられた。この爆竹作りも現金収入源である。村の一人当りの年平均収入は一九九二年で六〇〇元程である。

儼神を祠る沙江廟は村の東にある。『沙橋丁氏族譜』によると、明初に建てられたとされる。その後何回か修復されたが、清代嘉慶年間に最後に修復されたという。規模も大きく立派な建物で、まず門楼上段が舞台とされ、次の堂屋には額が掛けられ、一番奥の部屋に神龕が置かれる。神龕手前には、「勅封沙江橋金甲大將之神位」と記された神牌そして、神龕には仮面の御神体が置かれる。また部屋の右に土地神の像、左に総兵の像が配されている。

仮面の御神体は欧陽金甲大將軍と総称されるが、八体あり、それぞれ老太爺・二爺・老三爺・新三爺・新太爺・老四娘・新四娘・王將軍と各々称される。またそれぞれ神として祀られる前の生前の名があり、形状は大体同じだ

中国江西省万載県潭埠郷の追儺行事

廣田 律子

江西省万載県の將軍神による追儺行事を紹介する。御神体は仮面で、仮面の神格は將軍である。この將軍は歐陽金甲大將軍また菩薩と代表して総称されるが、実は將軍神は一人ではない。御神体は複数存在し、それぞれ神として祀られるようになったきっかけがある。きっかけは大抵、死者が人によりついで自分は○○と言う名だが、守護してやるから祀るようにと告げ、人々が御神体を彫って神として祀るようになるというものだ。神の名は歴史の本にも登場しないような人物であることが多い。しかし、それぞれ子授かりや治病といったことに関わる神々として、それぞれに人々から信仰を集めている。この人物神による追儺をまとめる。

一 人物神による追儺

江西省西北部に位置し湖南省に接する万載県に清代には、歐陽晃を祀る廟が耕畚坊の耕畚廟（現在馬歩郷）、下羅